



「追善の響き……熊野大花火大会」

生流
曼荼羅

NPO法人
熊野生流倶楽部

2008.9 VOL.5
特集

熊野大花火大会ツアー

- 第6回2008熊野塾ウォーク報告
- 生流倶楽部ミニツアーレポート

大阪市中央区石町2-1-7 天満橋グリーンコーポラス1003号
 (有限会社 環文化計画内) 〒540-0033
 TEL.06-6147-4191 FAX.06-6147-4192
<http://kumanoseiryu.net>

●嬉しいサプライズ……！
(一日目)

去る2008年8月17日・18日に、轟音と共に夏の夜空に大輪の花を咲かせる「熊野大花火観覧ツアー」に今年も行ってきました。何と今年は「一度行って二度美味しい…サプライズ！」があり、あの名物の熊野大花火のメインイベントを彩る「三尺玉海上自爆」(浜から400mの至近距離で、直径600mの花火が海上で爆発)が二度もあつたのです。平成20年を記念してですが…その名も「天地揺蕩」。当日が日曜日だったこともあって例年より人も多く、浜辺の観客は一同に「うおーっ！」と感動の嵐でした。

もともと熊野大花火大会の起源は、三百年の伝統を誇り、



お盆の初精霊供養に花火を打ち上げ、その花火の火の粉で灯籠焼を行ったのが始まりといわれています。時代と共に花火の規模が大きくなっても、やはり流石に「根の国・熊野」…その本来の目的である「初精霊供養」の要素は消えること無く、毎年花火のプログラムにちゃんと組み込まれ、打ち上げる前に必ずアナウンスが入るのが、また素晴らしいのです。また沖合いには、豪華クルーズ客船「飛鳥(あすか)」をはじめ、今年も三隻も大型客船が停泊しており、浜辺と海と客船に囲まれた熊野灘の空間が、海上花火の舞台としては最高の景観だったように感じました。

夕暮れと共に次から次へと繰り広げられるスターマインの花火の彩り。豊富なラインナップの斜め打出し花火や海上自爆水中花火、ナイアガラ…と見どころは尽きず、ラストの鬼ヶ城仕掛け花火の大音響は、崖や背景の山々・沖の客船にも響き渡り、参加者一同感動の渦で声も出ないほど…。その朝熊野までバスで4時間近くもかかり、道中「やはり遠いなアー！」と言っただけの方々も「イヤー！来年も是非来たいね」と、飛び火して燃えている山の火事を見ながら、はるばる来る価値を感じて頂いていたようです。



VOL.6 熊野塾 ウォーク

加藤 孝吉

4月26日(土)
道成寺〜千里王子



当日はお天気に恵まれ、程良い風もあり、絶好のウォーク日和となりました。
朝7時に梅田駅前に集合し、マイクロバスで出発。前回の到着地「道成寺」へと向かいました。
まずは道成寺をお参りし、全員で記念撮影！



そこからすぐに、またまたバスで日高川に移動し、川べりから歩き始めました。新緑や春の花々が咲き並ぶ道をのんびりと……。この辺りは風が少し強かったのですが、途中で見かける鯉のぼりはみんな元気そうに泳いでいました。



塩屋王子神社に立ち寄り、鳥居の左右に植えられているナギの木のおス、メスが、鳥居の上で枝を伸ばし絡み合っている光景に感動。そして観音寺を目ざしている山道を登り切ると突然視界が開け、海が視界に飛び込んできてまたまた感動。



塩屋王子神社のおス・メスの風の木



そして、今回もお楽しみの日食。海沿いの鮮魚販売店の中にある食堂で新鮮なお魚料理を頂きました。



国道沿いの鮮魚販売店経営の食堂です。料理のネタはさすがに納得！

下段上写真：中山王子／下写真：千里王子

古道とは関係なかったですが、町おこしの一環として「都会に行つた若者が町に帰ってくるように」と造られた「かえる橋」を見学。
これは目立つなあ
みんな
で眺めて
いると雨
がポツリ・
ポツリと…。
北海道では「〇ホが一番最初に雨に当たる」とか、他では「最初に雨に当たると親の死に目に会えない」：などとたわいもない話題で盛り上がりました。



そして、熊野塾ウォークを開始してから初の海に面した斑鳩王子に到着。小高い丘の上に立つ王子からは、鳥居の向に海が広がっていて、昔の人もここで海を眺めホッと一息したのではないかと思うと感慨深いモノがありました。

ありました。
その後には峠をひとつ越え、またまた海岸沿いに立つ岩代王子へ。岩代王子はJR紀勢本線・岩代駅のすぐ近く。なんと熊野や古道の事など全然知らなかった20年ほど前に、訳あってこの岩代駅を見るためだけに訪れ、記念撮影をしていたのでした。
岩代王子は浜辺の脇にあり、お参りの後、みんなで浜辺に座り、海を眺めていました。



そして、今回の終点「千里王子」。こちらにも浜辺の横にある王子で、とても穏やかな感じでした。ちょうど雲の切れ間から日差しが差し込み、幻想的な景色に足の疲れも忘れ見入っていました。
ほぼ予定通りのスケジュールで今回のウォークも終了し、最後は「梅干館」に寄って、美味しい梅干しのお土産を買い込みました(^^)V
※お知らせでは切目王子までの予定でしたが、千里王子まで脚を伸ばしました。



さあー問題はこれから(笑)
：毎年花火が終わった観覧現場から、常宿の熊野川の「さつき」への移動に頭を悩ます交通渋滞しかし、今年はとてもラッキー！バスの運転手さんの機転で通行止めの車列の中にバスが来てくれていてスムーズに乗車。二度もラッキーが続いた今年の熊野大花火大会なのでした。

●南方熊楠を訪ねて…！
(二日目)

朝早くいつものように成地仙人に宿へ来ていただきお話しをお聞きしていたところへ、参加者の方の知人でもある法螺貝(ほらがい)の達人が登場。俄に法螺貝ミニワークが始まり、新鮮な熊野の朝の空気を胸いっぱい呼吸してから田辺へ向けて出発。



成地仙人、法螺貝の達人も女性参加者に大人気！この光景もいつもと同じです。



出発前に全員で記念撮影

今回は二日目を熊野ウオークの継続地点である、田辺の南方熊楠を訪ねるプランにしました。一日目に立ち寄った熊楠ゆかりの巨木「引作の大楠」に続き、途中「野中の一方杉」や「野中の清水」「継桜王子」そして高原熊野神社に立ち寄り、熊野古道の雰囲気になじみ触れて一路白浜へ。



野中の一方杉



継桜王子社



高原熊野神社

白浜では南方熊楠記念館を訪ねましたが、今回の参加者の中に熊楠の血縁の方もおられ、記念館ではより詳しいビデオ説明を聞くことが出来ました。記念館の屋上からは、熊楠が愛した田辺湾や天神崎が遙か彼方に見える、パノラマのように眼下に広がる熊野灘の海が、真夏の太陽にキラキラと照らされ、ふと熊楠がそばにいるような気配を感じるような空気感がありました。次にいよいよ熊楠の活躍した田辺市内へ移動し、まず鬨鶏神社を訪ねました。源平の戦いで勝者を鬨鶏で占い、源氏に味方した熊野水軍の弁慶父子で有名で、熊楠はこの神社の娘さんをお奥さんに迎えた深い縁があるところ。境内には、熊楠がここのほか大事にした飯庵山と呼ばれる鬱蒼とした森や大きな楠があり、まさに熊楠が熊野生態系の中心研究基点としたその空気がよく伝わってきました。



弁慶親子の銅像

樹齢1200年
御神木の楠

夕暮れも迫る中、田辺の熊楠生家の顕彰館はいくお休みで、お墓参りもお盆も過ぎているので譲り、一路田辺湾に面した天神崎へ急ぎました。日本の「自然保護トラスト運動発祥の地」のここ天神崎の岩礁と後背地の丘陵に棲む動植物は、

750余種にも及び生命の尊さを学ぶ絶好の環境。あらためて熊楠の哲学思想が今も「天神崎の自然を大切にする会」と言う市民運動として受け継がれていることに感心しました。なぜ「自然を大切に！」かと言うと「守る」と言う言葉には「敵」の存在を意識させるから、この運動に「敵」はいない：皆の力を結集して自然を保護しようと言う考えからだそう、あらためて熊野の生命を大事にする懐の奥深さを感じたものでした。



今回のツアーは、天空に一瞬にして咲く刹那の彩りの花火と、永年の自然保護運動を展開するエコロジスト南方熊楠の哲学を垣間見る「両極の旅」でした。私たちの人生も瞬間瞬間に出会い紆余曲折しながらも生きていく日常と、人生を貫く自らの魂の願いの両方のバランスをうまく取りながら一筋の道を見つけていきたいものです。また一年後の熊野大花火を見て「パーティー」ダイナミックにその境地を語り合えればと思います。

生流倶楽部 ミニツアーレポート 淡路島

「淡路島・伊弉諾神宮と
沼島を訪ねる」レポート
6月28日(土)実施
廣田 朱美

「……天(あめ)の浮橋に立たして、その沼矛(ぬぼこ)を指し下ろしてかきたまえば、塩こをろこをろにかき鳴して引き上げたまふ時、その矛の末(さき)より垂り落つる塩、重なり積もりて島と成りき。これ淤能碁呂島(おのころじま)なり」 (『古事記』)



枯木神社

毎回スタッフや会員の方が行ってみたいな……と思う場所を訪ねるミニツアーこと(熊野ヒールینگツアー)今回は国生み神話が残っている事で有名な淡路島へ7名の参加者と4名のスタッフで出かけてきました。

いつもの通り、大阪中央郵便局前をマイクロボス(通称:みどり号)で出発し、明石海峡大橋を渡れば淡路島に上陸。まずは北淡ICで高速道路を降り、目指すは「枯木神社」です。日本書

紀に登場(595年)する香木が漂着し、島民が燃やしたらよい香りがしたので、朝廷に献上、聖徳太子が観音像を作ったとされ、その香木(沈香木)をご神体としてお祭りされています。また拝殿の彫刻が珍しい!伊弉諾大神(いざなぎのおおかみ)と伊弉冉大神(いざなみのおかみ)が子作りの際、女神のイザナミから声をかけたのが原因で、一番最初の神は不具の子=蛭子に生まれ、その島から流されたのですが、その様子が彫られています。



伊弉諾神宮



境内の日時計の地図

続いてその2柱神がご祭神である淡路国一ノ宮「伊弉諾神宮」へと向かいます。境内はかなり広く、すがすがしい気に溢れていると感じられました。境内には日時計があつて、南北・東西・夏至冬至のラインにどのような神社が存在しているのかを表記してあります。淡路島の一ノ宮

がどのような土地であるのかを理解する手助けになります。というのは、日本のエネルギー的な中心の場であり、そこに2柱神を祀る神社があるというのも、エネルギー的に見れば納得です。(ちなみに、淡路島と琵琶湖は対を成していて、淡路島の伊弉諾神宮と琵琶湖の多賀大社はどちらも伊弉諾・伊弉冉の二柱を祀る神社であり、この二つの神社は夏至の日の出日の入りラインを通じて対になっているように、淡路島と琵琶湖が同じような形をしていて、対であることは地図を良く見ればわかるそうです。)



伊弉諾神宮

スケジューリングがゆつたり、まったりのミニツアーですが、日帰りとなると欲も出てきて、次なる目的地、沼島へ行くのに渡船の時間が迫っており、地道を東へと走ります。なんとか出発予定時間の5分前に土生の港に到着。一行は無事船上の人に

バーの乗船、どうやら乗客は名物「鰻料理」を食べに沼島へ行く様子です。淡路島の南方5km紀伊水道北西部に浮かぶ、人口600人程の沼島は鰻の名産地で関西の高級料亭に卸されています。ちょうどランチ時に島へ到着した一行はなにはともあれ腹ごしらえ:と「あさま食堂」へ。

沼島は周囲10kmほどの勾玉形をした島で、古事記にあった「おのころ島」ではないかといわれています。自凝神社(おのころじんじや)は食堂からすぐの山道を分け入ると、天に向かうような階段があり、上りきった先にあります本殿は、やはりイザナギさんとイザナミさんを祭っています。途中小雨が降り始めましたが、傘をさすほどでもなく、なんだかミストに浄化されている……といった感じでした。次に島の中心をずんずん東へと進むと海岸線に約30mの「上立神岩」という竜宮の表門といわれる奇岩がそびえています。神秘的な岩、砕け散る波の音を聞きながら、しばしゆつたりと過ごしました。(行った人だけが体験できる究極のリラクゼーションタイムです)単なる物見遊山の観光ではなく、各々が何かを体得するのが、熊野ヒールینگツアーの売りなのです。



沼島八幡宮



神秘的な奇岩
上立神岩

帰りも予定通りの時間で土生港までの短い船旅を楽しみ、せっかくだからと(笑)三原温泉に立ち寄り、さっぱり汗を流して、地元のおばちゃんとも交流して、無事大阪に戻りました。淡路島は他にも見どころいっぱい魅力ある島です。まだまだ行きたい所もありましたが、それはいつかまたの機会に……。熊野生流倶楽部の会員の皆さん!どうぞ行ってみたいところがあれば、スタッフまでお知らせください。